

ONE LOVE

通信

66号

2019年9月1日発行

前の号から引き続き悩んでいる。同じようなことを悩んでいる。仕事で手を動かしている時間より、悩んでいる時間の方が長いのです。割り切ってしまうと吹っ切るけど、その数分後にはまた考えてる。そんなわけで最近私は首筋が痛い。常にピーンと突っ張らかっているように痛い。だから朝晩ストレッチをすることにした。たった数分のストレッチ。だけどこれがなかなか気を落ち着かせるには良い。やはり体を動かすのは良いことなのだ。

近い将来、ワンラブで毎朝ラジオ体操をする日も近い。



【まずは自分、材料や機材の悩み。】

気がつけば22年経っていた。よくそこここまで続けてくれた！と思う。長いような短いようなこの道のりは、ワンラブ通信を読んでくれているみんなと共に、そして虐殺後のルワンダと共に歩んでくることができた。ワンラブを支えてくれたすべてのものに感謝をしたい。

が、その年月のためいろんなことが老朽化してきたというのも事実です。例えば私の頭。これが一番老朽化が激しいのかもしれませんが。忘れっぽくなったし、集中力が落ちた。ついでにこらえ性もなくなった。だから常に「やることメモ」を目の前に置きながら仕事をする。まあ、そこそこのメモは役に立っている。

問題は集中力。これが非常に衰えた。例えばワンラブ通信を書くために、以前は一日で一気書き終えることができたけど、今はダラダラ、何書こうかな、あ、そういえばこの間もらったお煎餅食べようかな、猫に水あげるの忘れてた、など「わざと」余計なことを考え、現実逃避し、先へ先へと伸ばしてしまうのです。要するに集中しようとし

ない。だから自ずと無駄な時間が増え、仕事は遅れ、結局自分を責めるという状態になっています。

だからこの集中力を復活させる秘策を知っている人は、ぜひ私に教えてください。

そんな中、真面目に義足作りのことを考えてもいるのだが、長く活動が続き、段々と機械類が老朽化して、壊れたり、部品の交換が必要なが増えてきた。

今、ここで使っている機械のほぼすべては、活動を始めた22年前に買ったもの。当時のルワンダは虐殺から日も浅かったので、いろいろなものが不足していた。手に入らない機械も多かったので、自分たちで車を運転して、ケニアに行き、そこで買い付けたものが多い。ただケニアでも頑丈な機械はなかなか見つからず、日曜大工で使う機械に毛が生えたもの程度のものが多かった。

そんな機械類が最近調子悪くなってきたのです。例えば義足のソケット（足を入れる部分）を作るときに、材料を軟らかくするためのオープン。以前は温度調節ができたのに、今はできない。壊れてしまった。だからいちいち中を覗いて、材料の軟らかさ具合を見なくちゃいけない。たび



たびオープンを開けるものだから、中の温度がそのたびに下がってしまって、余計に電気代がかかるという悪循環。ルワンダ、電気代が結構高いので、開けるたびに頭の中でお金が落ちていく音がするのだ。ちなみにこのオープンは、日本であれば義足を作る専用のオープンがあるけど、ケニアにもそれは売っていなかったから、ローストチキンを作る用のオープンを買った。要するに中が熱くなれば良いわけですからね。だから時々それを使ってローストチキンを作る（ウソです）。

それから削るための機械。丸いディスク状の石で材料を削るのだけど、ディスクが使ってるうちに摩耗する。新しいものに交換したくても、ルワンダで規格に合った部品が見つからない。そして回転数も不安定になって来た。

例えば日本で機械を買う時、消耗品となる部品が手に入しやすいかなどを考えながら買うけど、こっちの場合とはにかく目の前にあるものを買うしかないわけで、後々の部品のことなど考える余地がない。だから古くなると、こんなふうな問題が出てきてしまうのです。今、ワンラブにある機械は、すべてこのような問題に直面していて、そろそろ買い替え時かなと思っております。

そして材料。これはスタートした時からずっと悩みの種でした。ルワンダ国内では義足作りの材料というのは、ほとんど手に入らない。だから輸入。そうすると輸送コストがかかったり、基本的には、障害者のための品物は非課税になるのだけど、ものによっては税金をかけられてしまう。それ故、義足一本にかかる費用がその分高つくというわけである。



削るための機械。
以前日本財団から寄付してもらったもの。
でも部品がルワンダで手に入らない…。

また些細な材料も手に入れにくい。簡単なネジ類も、あの日はあそこの金物屋さん売っていたけど、売り切れちゃって、どこにもないというのは、今でも日常茶飯事だ。

そして買ったはいいいけど、それが劣化して不良品の場合もたまにある。例えば切断した部分の型を取る石膏包帯。これも輸入品で、薬局などで売っている。その包帯を水につけて切断部に巻くと、だんだん固まるはずなのだが、いつまで経っても固まらない。そう、劣化してしまっているのですね。保管をしている間に湿気を含んでしまい、使いものにならない。自分たちの保管の仕方が悪くて劣化しているのであれば、自分たちの責任だけど、買ったばかりでもその状態のこともある。

そんなわけで、いつも材料のことでは悩んでいる。お金があったとしても、良いもの、正しいものを手に入れない。だからネジとか細かいものは、日本に行った時に買い込んで持って帰る。

そしてさらなる悩みは、義足の質。開所した時から今まで、ずっと同じ技術や材料で作っている。これにはいろいろな理由がある。まず材料が比較的手に入れやすいということ。要の部分はプラスチックのパイプを加工しているのだけど、それはケニアで手に入るインド製。たまにそれがルワンダに流通するときもあるし、どうしてもルワンダで手に入らなければ、ケニアに行けばある。そして値段も安い。ワンラブは無償で義足を配っているのだから、材料の値段が安いのは経済的にとても助かるのです。そして加工もしやすい。簡単に言ってしまうと、先のオープンに入れて軟らかくし、それを石膏で作った切断部の型にスポッとはめれば出来上がるのです。あとは角度などを調整しつつ部品を組み合わせればOK。



アメリカからルワンダに来た人が、持ってきてくれた中古の義足部品を再利用して作られた義足。
物がなければ、ないなりに工夫をしつつ…。

そんな理由でこの材料を使い続けているけれど、微妙に見た目が無骨だったり、精度が甘かったりするので、もう少しカッコイイのを作りたいのです。日本では樹脂を固めてソケットを作るので、それと同じようなものを作りたいなって思うのです。でもそれをするには①どこから材料を仕入れるか？②今使っている材料よりも高いので、ワンラブで継続できるのか？③その材料を使うために、また新たな機械が必要になるなどの問題が出てきます。

でもせっかく20年以上続けることができ、大虐殺後のものすごい勢いで患者さんたちが来ていた時代も過ぎ、落ち着いて義足作りに取り掛かれるようになった今、新しい技術をルワンダの人たちに教え、もっと良い義足を作れるようになれば良いと思うのです。大虐殺直後の、とにかくたくさん作って、一人でも多くの障害者が歩けるようになればというのではなく、一人一人に時間をかけて対応するような仕事の仕方に向かいたいと悩むのです。

ルワンダにいて自分のこと、仕事のこと、犬猫のこと、お腹がすいた、何を食べようなど、悩みはつきません。ガテラにも相談をするのですが、基本的に彼は「とにかくやってみよう」という答えを持つ人なので、いつまでもグジグジ悩んでいる私を一笑します。そして悩んでいることを悩んだりして、自分は一体何に悩んでいるのかわからなくなります。

いずれにしてもこれからもワンラブは続きます。だから悩みも続きます。でもいつかものすごいタイミングで、頭の中が晴れる時が来ると思っています。結局はこの23年、そんな感じでやってきたなあと。その都度その都度、ぶつつけ本番状態を22年、何とかここまでたどり着いた。だから多分これから先も大丈夫だろうなどと、能天気考える。…と言うか、結局考えても答えが出ないので、ガテラ

が言う通り、とにかくやっちゃう。失敗したらゴメンなさい。それが長く続いた秘訣なのかなあ、なんて思うのであります。

いい加減なワンラブですが、これからも見捨てないでくださいませ。

【チーム・ワンラブ結成したぞ！】

前号でガテラが競技用車いす「レーサー」を手に入れたことをご報告しましたが、今日はその練習の様子を少し。

一人で練習をしても面白くないので、チーム・ワンラブを結成しました。ガテラを含め6人のメンバーです。そのうち一人は、ワンラブのレストランで働いている女性。装具を履いています。残りはすべて男性。足を切断した人もいし、ポリオで障害を持っている人もいます。

ガテラ以外のメンバーはレーサーを持っていないので、ハンドバイクと呼ばれるものを使って練習をします。これは自転車と言うところのペダルが手のところについていて、それをぐるぐる回して進む仕組みになっています。

ワンラブランドは広いので、ここで練習ができれば良いのだけど、石を敷き詰めているので、ガタガタする。レーサーのタイヤは細いので、走っているうちに歪んでしまう可能性がある。というわけで、ワンラブランド内では走る練習はしていません。その代り、トレーニングマシンを手に入れ、はるばる日本からルワンダに運び込んだ専用のジムがあるので、ここでひたすら筋トレに励みます。夕方、三々五々みんながジムに集まり、好き勝手にトレーニングをします。終わったら、たまにはワンラブのレストランでビールで一杯やりながら、今後の作戦を練っています。

本格的にレーサーやハンドバイクを使って練習する日



ルワンダ事務所代表ガテラより

【ルワンダ大虐殺を正しく伝えろ。】

今年始まってすぐ、カガメ大統領が日本に来了。日本の新聞に取材記事が載っていた。しかし、そこにはまだルワンダの民族として、ツチ・フツ・トワがあると書かれていた。

俺たちが大虐殺が終わって25年間、ずっとその民族をなくそう、俺たちはルワンダ人だと言い続けてきたのに、日本の報道は未だに、ルワンダにはそれらの民族が存在すると書いているのだ。

新聞に抗議文を出したが、何も返事はない。そしてその情報の出どころを探ると、どうやら外務省のHPのようなのだ。国の機関である外務省が、その間違っただ情報を平気で流しているということを、とても遺憾に思う。

ルワンダは大虐殺後大きく発展し、日本も注目をしている。だが彼らはルワンダが何に苦しんだか、俺たちが今何と戦っているかということには、まったく関心がないのではないかな。なぜならば一番肝心なことを、正しく伝えないからだ。

さらに真実経緯で、日本人がルワンダについて発信している事柄も聞く。その内容も残念なことだらけだ。

ルワンダ大虐殺は、俺たちルワンダ人がやろうと思って始めたことでは、決してない。その背景にはベルギーの植民地

は限られています。一般道では車が行き交い、危ないです。だから練習日は以下の通り。

最終土曜日のウムガンダと呼ばれる日。この日の午前中はルワンダの人たち、みんなお掃除や農作業など諸々、奉仕をする日となっています。公の交通手段もストップします。その日を狙って道路で練習、もしくは競技場の回りをぐるぐる回って練習します。

それから第一・第三日曜日はカーフリーディと言って、この日も道路の一部の交通がシャットアウトされ、歩行者天国となります。その場所に行き、練習をするのです。この日はスポーツの日とも言われ、その歩行者天国を利用して、皆さんが一斉にスポーツをするのです。普段スポーツを全くしないであろう太ったおじさん、おばさんもトレーニングウェアに着替えて、豊満な体を揺さぶりつつジョギングに励んでいます。その傍ら、レーサーとハンドバイクが走り回っているのです。



チーム・ワンラブの面々。
カーフリーディの日に練習中。
みんな、注目されて喜んでいるところ。

ウムガンダの日は本来であれば、私たちも掃除の手伝いをしなくてはいけないのだけど、ガテラ、ルワンダ警察・市役所などから、特別の許可をもらいました。その日私たちはパラスポーツに励んでいいという許可です。こういう時、ガテラは政府に対しての動き、とても速いです。

政策によって翻弄されたルワンダの歴史がある。彼らがルワンダに入ってこなければ、間違いなく大虐殺は起きていなかった。なのに最近の日本人が発信する大虐殺の話は、この大切な部分が書かれていない。単にフツがツチを殺しましたと書くのみなのである。これは俺たちルワンダ人の感情を刺激する。だってまるで俺たちルワンダ人が憎しみ合って殺したように聞こえるではないか。ベルギーが自分たちの利益のために、ルワンダ人を民族に分け、憎しみ合うように教育し、大虐殺が起ったと書かなければ、事実は伝わらない。

だから俺は不満だ。どんな情報でも発信するのであれば、事実を正しく伝えろと思うのである。

日本の皆さん、ルワンダを訪れるのは大歓迎だ。どうせならルワンダを好きになって、日本に戻ってほしいと思う。だが俺たちルワンダ人にとって、未だ大きな傷となっている虐殺については、きちんと学んでほしい。なぜそれが起ってしまったのか、今俺たちは見えない何と戦っているのか。それを知らずして、虐殺のことは話さないでくれ。

治安が良くなったので、ルワンダの平和な部分が目に付くかもしれないが、虐殺の歴史なしには、ルワンダを語れない。そしてそれを正しく伝えることが、殺されていった人たちへの弔いになる。みんなの体験していないことではあるが、虐殺についての発信は心してやってほしいのである。

チーム・ワンラブの面々、それぞれがんばっています。でもちょっと調子に乗るところがあります。

少し前、ワンラブの活動をCNNが取材してくれました。義足作りだけではなく、スポーツの取り組みも取材してくれました。歩行者天国となるその日、カメラの回る中、ワンラブ・チームの面々は意気揚々と走っています。こんなふうに取材を受けるのは初めてなのでしょう。いつもよりかっこいいトレーニングウェアに身を包んでいます。

そういう彼ら、つい見栄を張っちゃうのですね。取材も終わり、ワンラブランドまで戻ろうという時に、「どうせなら、このままハンドバイクでワンラブまで戻ろう。その様子もぜひ撮影してください。」なんて言ってしまう。

そこからワンラブまでは石畳の、急な下り坂。普段平坦な道で練習している彼らが、この急坂でうまくブレーキを使いながら下れるとは思えない。普段から自転車に乗っていて、ブレーキの使い方のコツをつかんでいれば別だけど…。だから私はやめろと言った。慣れていないのに、あの急坂を下りるのは危ないと…。

でも彼ら、大丈夫なんて言って、どんどん進んじやった。そして撮影部隊もよし！とばかりに、あとを追いかけて行ってしまったのです。

チーム・ワンラブの練習の時、私は自転車で伴走する役目です。周りに危ないものがないか、落ちこぼれはいないかを監視するのです。そして今、みんなが私の反対を無視して、さっさと先に進んでしまったので、焦ってあとを追いかけるしかありません。

すると、しばらく行った坂の下に人だかりができています。そう、不安が的中し、ブレーキ操作を誤った一人が、顔面から転げ落ち、流血の事態となっていたのです。本人はおでこから血を流し、口を開けぐったりしていて、その周りを野次馬が群がっているという状態…。だから言ったでしょ、と突っ込まざるを得ない状況になっていたのです。



張り切り過ぎたチーム・ワンラブのメンバー。数針縫い、絆創膏を貼っている。奥さんも呆れたに違いない（中央の女性）。

怪我をした人を車に乗せ、近くの病院に行き、手当てをしてもらうものの、結局数針縫う結果になりました。手当のあと、心配して駆けつけた奥さんと共に、ワンラブに戻り、にこやかに飲み物を飲んでいたものの、その晩から顔がパンパンに腫れあがって、数日苦しんでいたらしい。そりゃそうだ。

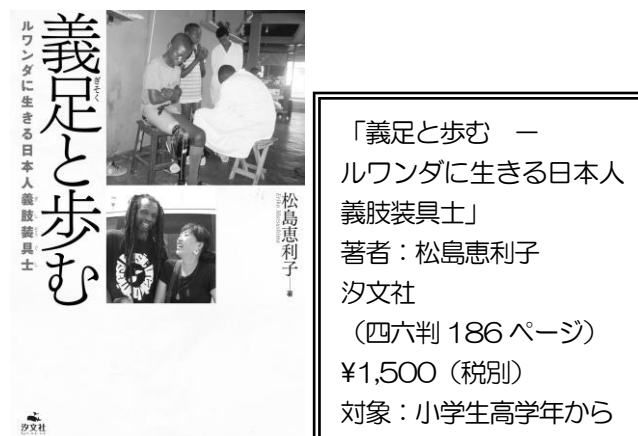
よくいるでしょ。小学生の男の子が、張り切りすぎてハマっちゃう。それと同じ精神年齢の彼らをまとめるのは、なかなか難しい。が、きっとこれで彼らも学習したことだろうと期待する。

果たしてどうなることやらチーム・ワンラブ。相変わらず、ガテラの東京パラリンピック出場は難問だらけで、が見えない状態だが、とにかく来年、日本で行われるどこかの車いすマラソンに参加するぞ！だからお前たちも続け～！とばかり、声をあげつつ、他のメンバーを刺激するガテラを、どうぞ応援してください。

【「義足と歩む」ワンラブの本が出ます！】

ワンラブ支援者の皆さま、お知らせです！この度ワンラブの半生を書いた児童書が出版されます。

ワンラブの今までの歩みが事実に忠実に書かれているので、これを読めばあなたもワンラブ通です。



「義足と歩む — ルワンダに生きる日本人義肢装具士」
著者：松島恵利子
汐文社
（四六判 186 ページ）
¥1,500（税別）
対象：小学生高学年から

児童書となっていますが、大人が読んで読みごたえがあります。このワンラブ通信が発行される頃は、既に出版されていると思いますので、ぜひこの機会に、20年以上にわたる私たちの活動を読んでみてください。

この本を書いたのは松島恵利子さん。なんと、5年もかけてワンラブのことを取材してくれました。熱すぎるラブコールは私の心を溶かしました。

松島さんはフリーライター・脚本家として精力的に活躍されており、日本人のアイドルでもある「ちびまる子ちゃん」の脚本を10年に渡り手掛けています。きっとあなたも松島さんの描いたまる子ちゃんストーリーを見たことがあるはずです。それだけでなく公官庁の人権啓発ドラマなども手掛けたりと、そのプロの仕事っぷりは心地よいです。

私と同年の彼女に対し、私は最初はあまりの熱いラブコールに胡散臭さを感じておりましたが、いつしか押し切られ、ワンラブのことを愚痴も含めていろいろ話せる人になってくれました。青春時代の話をしていると、あまりの共通点の多さに、夜が更けてしまいます。

帰国のたびに、活動の話をいろいろな所でしている私たちですが、彼女は飽きることなく、あちこちで話を聞いてくれました。そして一緒に笑ったり怒ったりしてくれました。涙もろいのも彼女の特徴です。

それでも取材が足りない！と彼女は息子さんを連れ、ルワンダまで来てくれたのです。ルワンダを自分で体験し、私が何にいつもイラついているのかということを知ってもらい、私自身の心がとても楽になりました。

私の思いに少しでも近づけようと、何度も何度も原稿を書き直してくれました。彼女の体にまるで私が憑依したか

の如く心情をわかってくれ、イタコ作家と呼びたくなるくらいです。

どうぞ皆さま、この本を読んでください。そしてお願いしたいことがあります。

本の印税の一部がワンラブに寄付されます。障害者支援につながるのです。またワンラブの輪を広げるために、この本をご家族やお友だちに紹介してください。

- ① お住まいの地域、職場近くの図書館に、この本を置いてもらうようリクエストしてください。
- ② 学校関係者、学校の図書館に一冊置いてください。そしてルワンダの大虐殺を教訓に、子供たちに平和を教えてください。
- ③ Amazon などでご購入の際、書評を書いてください。書評を読んで、たくさんの方が本に関心を持ってくれます。

日本に帰国の際は、私も背中に担いで売り歩くつもりです。だから今からスクワットをして足腰を鍛えておきます。

皆さま、どうぞよろしく！！一家に一冊、目指せ！ベストセラーなのだ！

【そして最後に私の深刻な悩み。】

最後にもう一つの悩み、それは日本からワンラブを訪ねて来てくれる人たちに対してです。活動を知ってもらうため、工房を見学してくれる人は大歓迎です。テレビで取り上げられたり、ガイドブックに載ったりして、ワンラブの存在を知ってくれる人が増えました。そういう人たちが訪問してくれます。でも突然連絡もなしに来る人、結構多いです。突然来て名乗らない人も多いです。名前を聞いても一言「旅のものです」と言うだけの人もいます。どこの誰で、なぜ見学しようと思ったのか、そういう言葉もありません。またある時はビールを片手にやってきた人もいました。人の会社を訪問する時にビールを持って、飲みながら来る人はいませんよね？自分は旅行をしているから自由だと思っているのか？そんな人であってもはるばる遠くからやってきた人を受け入れなくてはいけないのか？そして私が案内をしているにもかかわらず、そっぽを向いて聞いていない人もいます。一体何しにここにきたのか？時間をつぶすためののかと思う時もあります。

工房を案内するために、当然私は自分の仕事の手を止めます。ゆとりのある時であれば、それも可能です。でも休暇シーズンは、その対応に追われる日が続いたりします。

基本的にワンラブは無償で義足を提供しています。だからいつも資金をどうやって集めようかと頭を悩ませています。訪問した人を案内しても、不毛の時間となることも多いので、自分の中で資金集めにつなげようという思いから、訪問する人に寄付をお願いするようにしました。その方が私も手を抜かずに案内ができると思ったからです。だから連絡のあった人には前もって寄付をお願いをした上で、案内をします。

しかしここから私のさらなる悩みが発生するのです。寄

付を置いていってくださいとお願いをしたにもかかわらず、何も置いていかず去って行く人。アフリカだから物価が低いと思い、本当にわずかの寄付しか置いていかない人。寄付をお願いしておきながら、金額のことを言うのはとても心苦しいのですが、私も自分なりに誠意をもって相手に対応し、場合によっては半日潰れるくらい時間をかけているのに、ビールが一本買えるだけの寄付をいただいたときには、申し訳ないけれど心が折れそうになりました。

来たい、見たい、知りたいと思っている人を拒むつもりはありません。その人が知ってくれることにより、私たちの活動が広がっていくから。でも一緒に時間を費やす限りは、お互いに得るものを理解した上で、共に過ごしたいと思うのです。

私が遠路はるばる日本から来る人を選んでしまったり、彼らに寄付をお願いすることは偉そうでわがままでしょうか？人から寄付をもらわない限り続けることのできないワンラブが、こういうことを言ってしまうのは間違っているのでしょうか？

活動の運営やスタッフとのやり取り、頭を悩ませることはたくさんあります。でも目下のところ、このルワンダにおける日本人への対応が、私の大きな悩みになっています。

関心の薄い人に来てもらおうとは思いません。人の興味はそれぞれ違ってきますから。でもここに来ると連絡をし、私の時間を使う限りは、相手にはきちんと聞いてほしいです。そして疑問があれば、何でも聞いてほしいです。

寄付のお願いについては、私もあまり言いたくありません。強制することではありませんから。でも前もって話をし、同意したのであれば、やはり置いていってほしいです。きちんと活動の一部となる金額の寄付を。

実はこのところ、そうして寄付をお願いしたにもかかわらず、そのまま帰る人が続いてしまったので、どうにもこの現状を吐き出たく、ワンラブ通信に書いてしまいました。これを読んで不快になる人がいるかもしれません。その方たちには私の高慢さをお詫びします。

しかしながら私自身もルワンダに来て、生活から贅沢というものを排除しようと、いろいろなものを我慢しながら生きています。でもついこの間、どうにも空しさがつのり、初めてハーゲンダッツのアイスクリームを買っちゃいました。日本円にして 1,400 円くらい（高い！）。私にとっては清水の舞台から飛び降りる気持ちで買ったアイスクリームでした。

悩み、という形で書いていますが、私の心は既に決まっており、今後も工房を見学する人には寄付のお願いをするつもりです。なぜお願いをするのか、ご理解していただければ幸いです。

自分たちだけでは何もできません。人の力を借りなくては、活動を続けられません。それは人力であり、知恵であり、またお金でもあります。この件についてご意見のある方は、どうぞ私までご連絡ください。そして一緒に考えていただけるとありがたいです。



雑文もろもろ

うちのレストランを切り盛りしているアリーネ。2児の母として、非常にがんばって働いている。私たちが日本に帰国中は、孤軍奮闘している。レストランの運営はもちろんのこと、壊れたところの修理、スタッフの仕事っぷりチェック、給料の支払いなど、義肢製作所の管理も含め、すべてをこなしている。背中に赤ん坊をおんぶしながら、働いているので、段々体つきも遅しくなってきた。

今までレストランは私たちが取りしきり、アリーネはマネージャーとして働いていたが、今は違う。私たちはレストラン運営から距離を置き、アリーネに家賃を払ってもらおうという形を取っている。つまり家賃を抜いたすべての収益はアリーネのもの。そうすることにより、アリーネ自身が経営を厳しい目でチェックできるからだ。べらぼうな客入りはないものの、コツコツとお金を貯めたのでしょね。

何とあの若さで(まだ20代)家を買いました。もちろんローンを組んだけど、すごいな~と思います。空港近くにある一軒家で、子供たちと暮らしています。さらに私たちが今まで使っていた中古車を買取り、それで通勤しています。大虐殺で家族を失ったアリーネは、子供を産み、家族を増やし、自分の人生を作っています。日本より安めに家が手に入るとは言え、それにしても家を買うというのはすごいことです。彼女が一生懸命働いた証拠でしょう。

新居お披露目のためにアリーネは、ワンラブのスタッフ、近所の人を呼んで、お祝いをしました。

普段私とアリーネはそれほど会話をしません。必要なことのみ。ガテラとは仕事のことでよく話をしているし、子供たちの父親と間違えてしまいそうなくらい、なつかれています。そんな私に対して無口なアリーネが、その時に、私に感謝の気持ちを伝えてくれたのはうれしかった。

小さい子供二人を抱えて、朝から晩まで水商売をするのは大変だったろうと思う。でもその努力の成果が家を買うという形で表れ、つくづく女は強いなあと思うのでした。

今まで何人もの人がワンラブのレストランを借りて商売をしたけど、こんな形で成功したのは彼女だけである。

子供を抱えた母親、否が応でも強くなるという、素晴らしい見本でした。

【ご寄付をありがとうございました。】

ワンラブ通信65号をお送りしてから今までのご寄付は以下のとおりでした(4~7月)

4月	円
5月	円
6月	円
7月	円

このおかげで次の製品を配布することができました。

義足	15本
装具	3本
杖	41本
車いす	2台

【ルワンダの治安。】

この頃ルワンダでは詐欺事件が多発しています。昔より増えたと思います。電話を使って詐欺をする手口は、オレオレ詐欺のようなものだったりします。

今、ルワンダのことを調べると、治安が良いということが前面に出ています。確かに他のアフリカ諸国よりも治安は良いかもしれませんが。私自身、ルワンダで犯罪に巻き込まれたということはありません。

でももろ手を挙げてルワンダが安全だと言い切るのは、とても危険だと思います。

人は旅行に行くと、つい開放的になって、普段日本ではしないようなこともしてしまったりします。町で声をかけられて、親切な人だとさっさと思い込み、その日のうちにその人の家に行ってしまう日本人女性。神経を疑います。

ルワンダが安全だと思い込む前に、些細な犯罪は世界中どこにでもあるということを頭の中に叩き込んでほしい。

開放的になった頭は、疑いもせずに情報を信じます。ルワンダは安全、夜も一人で歩いても大丈夫と。

いいえ、たまたま犯罪に遭わなかっただけです。運が良かっただけの情報を、あちこちで流すのはやめていただきたい。それを信じて、夜歩きをしてしまう間抜けな娘さんもいますから。

現実には犯罪に巻き込まれているルワンダの人、たくさんいます。家に泥棒が入ったなどの犯罪は、残念ながら日常的に起きています。人を騙してお金を盗ろうと思っている人も、たくさんいます。そうして騙されたワンラブのスタッフが給料の前借をしに来るので、身をもって知っています。

町で声をかける物売りのお兄さんたち。決して悪い人ではないと思います。でも日本で同じような状況で声をかけて来た男の人の家に、すぐに遊びに行っちゃたりしますか？

そういう警戒心のなさは、すごく危なっかしく見えて、ここに長く住んでしまった私としては、小言を言いたくなるのでした。

でも自分が気を付けることによって、避けられる犯罪はたくさんあると思います。旅行をして、心を開放するのも良いけれど、自分の身は自分で守る、これが旅行の基本かなと思うのです。

【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆さまのご意見等を積極的に取り入れていきたいと思っています。ルワンダについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、ボランティアも常時募集しております。またルワンダで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

【おことわり】

*発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

*当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはありません。

書き損じハガキ、未使用切手は下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。

ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いております。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町 12-28-304 TEL: 080-6564-4448

info@onelove-project.info(日本事務所) onelove@rwanda1.rw(ルワンダ事務所)

郵便振替口座: 00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信66号 2019年9月

発行: ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>



One Love
Mulindi Japan One Love Project